
Dark in Light

暁 亜季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dark in Light

【Nコード】

N2986Z

【作者名】

暁 亜季

【あらすじ】

「鉄格子の隙間から見える大空は私の心とは正反対で、綺麗で手を伸ばしたけど無理だった」

「ただ、大空を自由に羽ばたける鳥になりたかった」
学園で平穏な日々を過ごす佐倉蜜柑。

今日もいつもの日々が来る　はずだった。あの転入生達が来るまでは…。

平穏な日々を崩す足音は突然やってきた、全てを壊すために。
これは闇に囚われた人の話。

プロローグ

『お前は人間じゃない』

私の中に響く言葉。

呪縛のように締め付ける言葉。

『貴方は気味が悪いですね』

ヤメテ……

普通って何……？

他の人と違うモノを持つていたら、人じゃないの……？

『お前は人間じゃないんだよ。お前は』

ヤメテ……

それ以上、言わないで

ヤメテ……ッ！

聞きたくない……！

『お前は、私の可愛い人形だ。』

オマエハ、ワタシノニンギョウダ

頭の中を木霊する。

イヤ……

私は、お前の人形じゃない。

私は私だよ？

誰か気づいて

『さあ、おいで。私の可愛い人形……』

チガウ……！

人形じゃない。一人の人間だよ。

『お前に光はないよ。お前には必要ない。闇の中で我々と一緒に生

きてくんた。』

光がほしい。

この闇を照らせるくらいの光がほしい。

力がほしい。

早く、この生活から逃げたい。

それだけの力が…、光がほしい。

誰か…

私の名前を呼んで。

気味悪がらないで。

私に近づいてきてよ。

誰でもいいから…

私を見つけて。

助けて。

誰でも良いから

太陽のように眩しい光みたいなお顔を私に向けてください。

私に光という名の希望をください。

プロローグ（後書き）

これは中学生の時にとあるマンガを元に書いた作品です。

駄文で申し訳ないですが、最後まで読んでいただけると嬉しいです。

それでは、

次回もお楽しみに…。。

感想またはダメ出しお待ちしております。

第零話

月食で月が空に浮かばない夜。

周囲は薄暗い闇に包まれ、この場所に誰一人として出歩いているものはいなかった。無論、音がする物はなく、静粛だけがその場を支配している。

「はあ…はあはあ………」

だが、その中で聞こえる人の息づかい。

タッタタタ…

そして、何かから逃げるような足音。闇の中、人の形をした影が通り過ぎた。

「ハアハア…これで…これで…自由だ」

息を切らしながら、影は呟く。その言葉にはどこか嬉しさが込められているように感じられる。

「もう、何にも縛られる事なく生きてける…。もう、何にも…」

再び呟くと影はまた走り出し、ついにはその場からいなくなっていた。

第一話

それは突然だった。

蜜柑が蛍を追いかけ、学園に来てから一年が経とうとしていた頃。楽しい日々を送っている蜜柑達にそれが訪れたのは、あまりにも突然で……。

雲一つない青空のある日、それは訪れた。

「ここか」

学園の大きな門の前に、少年と少女が佇んでいた。容姿からして小学生くらいだろう。

「あの方はいるのかな？」

「わからない。だが、もし、姿・形が変わっていたとしてもあの力だけは隠せないはずだ。」

少年は大きな学園の門を見上げながら、何処か確信めいたように言った。

「そうだね。」

対して少女は言葉と共に、クスツと微笑みを返した。

「行くう」

少年の言葉を合図に、二人は門の中へと足を踏み入れた。

ガラガラガラ

「は〜い！おはようございます」

突然、開いた教室の扉の音と共にド派手な格好をした男が入ってきた。彼の名は鳴海。小等部B組の担任である。

此処は初等部B組。賑やかなクラスである。B組生徒達は鳴海を見るなり、呆れや皮肉を込めた目をしながらも彼らなりの挨拶の言葉を返す。

「『今日も一段と派手だね』」

「褒めてくれてありがとう」

一方の鳴海は気づいてないのか、それとも気にしていないのか嬉しそうに言葉を返す。

「褒めてない褒めてない」

すると、読心術のアリスを持った心読みとフライング能力を持つキツネ目の敵しいツツコミが炸裂した。

「あれ？そうなの？ まあいいっか！」

「（良いのかよっ！？）」

全員が同じ事を思った瞬間だった。

相変わらずの鳴海のテンションに誰もがついていけない状況であったが、彼は気にとめる様子もなく話を続ける。

「じゃあ、まずは出席をとりまゝす いない子は……、蜜柑ちゃんかぁ。お寝坊さんかな？」

鳴海は再度、全体を見回し確認してから名簿に記入すると、先ほどよりもさらに楽しそうな笑みを浮かべていた。

いつになく、楽しそうな笑みを見せている鳴海にB組全員の顔は引きつっている。「実は今日、嬉しいお知らせがあり」

「転入生！！」

「あ、相変わらず情報が早いね。じゃあ、入って来てもらおうかな」

少しばかり苦笑を浮かべつつも、扉を開け、廊下に向かって手招きをする。

すると、藍色の髪に黒い瞳をした少年とオレンジに近い茶髪にエメラルドグリーン瞳をした少女が悠然と入ってきた。

「あ…キヤーー！！」

「かっこいいー！！」

「か……かわいいっ！！」

「天使が舞い降りたぞーっ！！」

ある数名を除いた誰もがそう言った。あるいは呟いた。まさにクラスは一種のパニック状態と化していた。

そんな中、妖艶な微笑を浮かべながら転入生を見つめている生徒が一人いた。ショートボブの綺麗な黒髪に紫色の瞳の少女。

彼女の名は今井 蛍。発明のアリスを持つ彼女は口元に薄く笑みを浮かべ、瞳に「¥」のマークを浮かばせている。

そんな彼女の様子に気づいた二人がいた。

一人は金髪に蒼色の瞳に可愛らしい兎を抱いた、女の子と間違えられそうな可憐な少年。

彼の名は乃木 流架。動物フェロモンのアリスを持つ。

もう一人は黒髪に紅い瞳の顔立ちがキリツとした少年。

こちらの彼の名は日向 棗。発火能力を持つ彼は能力の高さ故にクラスではボスの存在だった。

近くの席いた棗と流架は、彼女がこれからするであろう行動に予想がついていた。改めて自分達も同じだと考えると、うっすら背筋が寒くなる。棗と流架は冷ややかな、というよりも若干 飽きれ顔で見ていた。

パンパンツ

鳴海が手を叩いた。その音と共に誰もが騒ぐのを止め、鳴海に注目する。

「はい、静かに！じゃあ、今から自己紹介をしてもらおうかな」
鳴海はそう言い、転入生を促す。

それを受けてか、転入生の男子が口を開いた。

ガラガラ

突如、紹介の途中で勢いよく扉が開かれた。音につられ、全員が転入生までもがその方を見る。

「ハアハア…。鳴海先生、おはようございませ〜！」

そこには、一人の 茶色の瞳に茶色の髪を二つに結んだ 少女が驚愕の表情を浮かべ立ち尽くしていた。

彼女の名は佐倉 蜜柑。無効化のアリスを持つ彼女は一年前に転入してきたばかり。

蜜柑は途切れた言葉を続けることもなく、鳴海を、いや、彼の先に

いる転入生達を捉えていた。

「どうしたんだい、蜜柑ちゃん？」

蜜柑の異変に気づいた鳴海が聞いた。

「みかん……？」

すると、転入生の二人は蜜柑の名前に強く反応を見せる。

「……な……んで……」

掠れた声で言った蜜柑の表情は驚きから徐々に青ざめていく。

「蜜柑……？」

「佐倉、どうしたんだらう……？」

「……」

蛍や流架・棗は不思議そうに見ていた。生徒達も不思議に思いながらも黙ってその光景を見ていた。

すると、蜜柑は何かを取り付くように大慌てで口をパクパクとさせる。

「あ……失礼しました！」

ガラガラ

やっと出た言葉と共に、彼女は教室を出てしまった。

「み、蜜柑ちゃん！」

「えっ！？」

「……どうしたんだ！？佐倉の奴……？」

蜜柑の行動に鳴海を始め、誰もが驚き、口々にそう言っていた。

転入生の二人は内、女子の方はかなり驚いているものの、男子の方は戸惑いや驚きを見せることなく、鳴海に聞いた。

「……鳴海先生。今の方は……？」

「今の……？ああ。彼女は佐倉蜜柑ちゃんだよ。知ってるのかい？」

鳴海は不思議そうな顔をしながら転入生に聞いた。

「ええ。まあ……。あの方は」ガラガラ

再び勢い良く扉が開き、言葉が遮られる。

扉を開けたのは先程、廊下に戻って行った蜜柑である。

「やはり、そうでしたか……」

「今井さん・蜜柑ちゃん静かにね！」

蛍がまた蜜柑に問いかけようと呼んだ時、二人の事を注意した鳴海の声がタイミング良く？被さり遮られてしまった。

「つち……………」

蛍は舌打ちをすると、鳴海を睨む。

「あ…えー、じゃあ、自己紹介をしてくれるかな」

鳴海は苦笑を浮かべつつも転入生に言っていると、彼らは答え始めた。

「俺は、水野 新。アリスは氷のアリス。よろしく」

「私は藤咲 由那です。アリスは笛のアリスです。よろしくね」

初めに転入生の少年・新が答え、次に少女・由那が微笑を交えながら言う。

「…きゃー！！新君…！！」

「…由那ちゃん！！もっと笑ってくれ／＼／」

彼らの紹介にクラス中がもう一度、騒ぎ出した。誰もが顔を赤らめ、隣近所と話始めていた。

「ちなみに新君と由那ちゃん的能力別クラスは、二人の希望で“特別能力系”だよ」

「ありがとうございます、鳴海先生。」

新は鳴海に頭を軽く下げる。

「あの、私達の席は…？」

「そうだなあ。じゃあ、棗君と流架君の前が空いてるから、そこに座ってもらおうかつ！」

鳴海はそう言い、新と由那に空いている席を指さす。

「わかりました。」

ガタンッ

二人が席に着くのを確認すると、鳴海は皆に向かって言う。

「二人のパートナーだけ…」

「…はい！はい！」

クラスの過半数が凄い勢いで手を挙げ出す。

その中で由那が静かに手を挙げた。

「はい、由那ちゃん！」

鳴海が言うと、全員が一齐に由那を見る。

「あの…佐倉蜜柑さんがいいんです…」

由那はそう言うと、チラリッと蜜柑を見て微笑んだ。

「…っ！いな、鳴海先生！」

「蜜柑ちゃん、どうかしたかな？」

「ウチ、パートナーはやりとうないです。せやから、他の人にしてください！」

蜜柑は由那と新を見据えて、席に着く。

「…じゃあ、私達がやりたいです…！」

「…俺も…！」

辺りは蜜柑が断ったことに驚いている者もいれば、それに乗じて自分にしてくれと言う声が幾多にも重なり響いていた。

「じゃあ、ここはやっぱりくじで決めることにします」

「…はい…」

そんな声に歯止めを掛ける為に鳴海が提案したのだった。

それから約5分。

「よろしくお願いします…！」

「よろしく、佐倉蜜柑さん」

くじの結果、何の因果か断った蜜柑に決まったのだった。

新と由那は笑顔で言うが、蜜柑はいつもでは珍しく二人とは一言も喋らずにいた。しかし、瞳だけは真剣さを帯びており、一心に由那と新を捉えていた。

「…佐倉、いいな…」

「…なんで佐倉さんばかり……」

「…蜜柑ちゃん、羨ましいなあ…」

誰もが羨ましがり、蜜柑を見ていた。

しかし、皆の気持ちとは裏腹に何の感情もないように彼らを捉えている瞳だけがあった。

「……………」

蛍はいつもと違う蜜柑に気づき、不思議に思っていた。

「じゃあ、質問とかは一時間目の自習時間でもしてね」

鳴海はクラスの盛り上がりなりに満足したのかそれだけを言い残すと、教室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2986z/>

Dark in Light

2011年12月10日23時54分発行